

ある夜の星たちの話

小川未明

青空文庫

それは、寒い、寒い冬の夜のことでありました。空は、青々として、研がれた鏡のように澄んでいました。一片の雲すらなく、風も、寒さのために傷んで、すすり泣きするような細い声をたてて吹いている、秋のことでありました。

はるか、遠い、遠い、星の世界から、下の方の地球を見ますと、真っ白に霜に包まれていました。

いつも、ぐるぐるとまわっている水車場の車は止まっていました。また、いつもさらさらといって流れている小川の水も、止まって動きませんでした。みんな寒さのために凍ってしまったのです。そして、田の面には、氷が張っていました。

「地球の上は、しんとしていて、寒そうに見えるな。」と、このとき、星の一つがいました。

平常は、大空にちらばっている星たちは、めつたに話をすることはありません。なんでも、こんなような、寒い冬の晩で、雲もなく、風もあまり吹かないときでなければ、彼らは言葉を交わし合わないのです。

なんでも、しんとした、澄みわたった夜が、星たちには、いちばん好きなのです。星た

ちは、騒さわがしいことは好このみませんでした。なぜというに、星ほしの声こえは、それはそれはかすかなものであったからであります。ちょうど真夜中まよなかの一時じから、二時じごろにかけてでありました。夜よるの中うちでも、いちばんしんとした、寒さむい刻こく限げんでありました。

「いまごろは、だれも、この寒さむさに、起おきているものはなからう。木立こだちも、眠ねむつていれば、山やまにすんでいる獣けものは、穴あなにはいつて眠ねむつているであらうし、水みずの中なかにすんでいる魚さかなは、なにかの物蔭ものかげにすくんで、じつとしてゐるにちがいない。生いきているものは、みんな休やすんでいるであらう。」と、一つの星ほしがいました。

このとき、これに對たいして、あちらに輝かがやいている小さな星ほしがいました。この星ほしは、終しゆう夜や、下したの世界せかいを見守みまもつてゐる、やさしい星ほしでありました。

「いえ、いま起おきている人ひとがあります。私わたしは一軒けんの貧まずしげな家いえをのぞきますと、二人ふたりの子こ供どもは、昼間ひるまの疲つかれですやすやとよく休やすんでいました。姉あねのほうの子こは、工場こうばへいつて働はたらいているのです。弟おとうとのほうの子こは、電でん車しやの通とおる道みちの角かどに立つて新聞しんぶんを売うつてゐるのです。二人ふたりの子こ供どもは、よくお母かあさんのいうことをききます。二人ふたりとも、あまり年としがいつていませんの、もう世よの中なかに出でて働はたらいて、貧まずしい一家いつかのために生せい活かつの助たすけをしなければならぬのです。母ははおや親おやは、乳飲ちのみ児ごを抱だいて休やすんでいました。しかし、乳ちちが乏とほしいのでした。

赤ん坊は、毎晩夜中になると乳をほしがります。いま、お母さんは、この夜中に起きて、火鉢で牛乳のびんをあたたためています。そして、もう赤ちやんがかれこれ、お乳をほしがる時分だと思っています。」

「二人の子供はどんな夢を見ているだろうか？　せめて夢になりと、楽しい夢を見せてやりたいものだ。」と、ほかの一つの星がいました。

「いや、姉のほうの子は、お友だちと公園へいつて、道を歩いている夢を見えています。春の日なので、いろいろの草花が、花壇の中に咲いています。その花の名などを、二人が話し合っています。ふとんの外へ出ている顔に、やさしいほほえみが浮かんでいます。」

この姉のほうの子は、いま幸福であります。」と、やさしい星は答えました。

「男の子は、どんな夢を見ているだろうか？」と、またほかの星がたずねました。

「あの子は、昨日、いつものように、停車場に立って新聞を売っていますと、どこかの大きな犬がやってきて、ふいに、子供に向かつてほえついたので、どんなに、はびつくりしたでしょう。そのことが、頭にあるとみえて、いま大きな犬に追いかけられた夢を見てしくしくと泣いていました。無邪気なほおの上に涙が流れて、うす暗い燈火の光が、それを照らしています。」と、やさしい星は答えました。

すると、いままで黙^{だま}っていた、遠^{えん}方^{ぼう}にあつた星^{ほし}が、ふいに声^{こえ}をたてて、

「その子供^{こども}が、かわいそうじやないか。だれか、どうかしてやったらいいに。」といいま
した。

「私^{わたし}は、その子^こが、目^めをさまさないほどに、揺^ゆり起^おきました。そして、それが夢^{ゆめ}である
ことを知^しらしてやりました。それから子供^{こども}は、やすやすと平和^{へいわ}に眠^{ねむ}っています。」と、や
さしい星^{ほし}は答^{こた}えました。

星^{ほし}たちは、それで、二人^{ふたり}の子供^{こども}らについては、安^{あん}心^{しん}したようです。ただ哀^{あわ}れな母^は親^{おや}
が、この寒^{さむ}い夜^{よる}にひとり起^おきて、牛^{ぎゅう}乳^{にゅう}を温^{あた}めているのを不^ふ憫^{びん}に思^{おも}っていました。

それから、しばらく、星^{ほし}たちは沈^{ちん}黙^{もく}をしていました。が、たちまち、一つの星^{ほし}が、

「まだ、ほかに、働^{はたら}いているものはないか？」とききました。

その星^{ほし}は、目^めの見^みえない、運^{うん}命^{めい}をつかさどる星^{ほし}でありました。

下^げ界^{かい}のことを、いつも忠^{ちゅう}実^{じつ}に見^み守^もっているやさしい星^{ほし}は、これに答^{こた}えて、

「汽車^{きしや}が、夜^よ中^{なか}通^{とお}っています。」といいました。

ほんとうに、汽車^{きしや}ばかりは、どんな寒^{さむ}い晩^{ばん}にも、風^{かぜ}の吹^ふく晩^{ばん}にも、雨^{あめ}の降^ふる晩^{ばん}にも、休^{やす}
まずに働^{はたら}いています。

「汽車が通っている？」と、盲目の星は、きき返しました。

「そうです、汽車が、通っています。町からさびしい野原へ、野原から山の間を、休まずに通っています。その中に乗っている乗客は、たいてい遠いところへ旅をする人々でした。この人たちは、みんな疲れて居眠りをしています。けれど、汽車だけは休まずに走りつづけています。」と、下界のようすをくわしく知っている星は答えました。

「よく、そう体が疲れずに、汽車は走れたものだ。」と、運命の星は、頭をかしげました。

「その体が、堅い鉄で造られていますから、さまで応えないのです。」と、やさしい星がいました。

これを聞くと、運命の星は、身動きをしました。そして、怖ろしくすごい光を放しました。なにか、自分の氣にいらぬことがあったからです。

「そんなに堅固な、身のほどの知らない、鉄というものが、この宇宙に存在するのか？ 俺は、そのことをすこしも知らなかった。」と、盲目の星はいいました。

鉄という、堅固なものが存在して、自分に反抗するように考えたからです。このとき、やさしい星はいいました。

「すべてのものの運命をつかさどっているあなたに、なんで汽車が反抗できますものですか。汽車や、線路は、鉄で造られてはいますが、その月日のたつうちにはいつかはしらず、磨滅してしまうのです。みんな、あなたに征服されます。あなたをおそれないものはおそらく、この宇宙に、ただの一つもありますまい。」
これを聞くと、運命の星は、快げにほほえみました。そして、うなずいたのであります。

また、しばらく時間が過ぎました。空に風が出たようです。だんだん暁が近づいてくることが知れました。

星たちは、しばらく、みんな黙っていました。このとき、ある星が、

「もう、ほかに変わったことがないか。」といいました。

ちやうど、このときまで、熱心に下の地球を見守っていました。やさしい星は、

「いま、二つの工場の煙突が、たがいに、どちらが毎日、早く鳴るかといって、いい争っているのです。」といいました。

「それは、おもしろいことだ。煙突がいい争っているのですか？」と、一つの星は、たずねました。

新開地にできた工場が、並び合つて二つありました。一つの工場は紡績工場でありました。そして一つの工場は、製紙工場でありました。毎朝、五時に汽笛が鳴るのですが、いつもこの二つは前後して、同じ時刻に鳴るのでした。

二つの工場の屋根には、おのおの高い煙突が立っていました。星晴れのした寒い空に、二つは高く頭をもたげていましたが、この朝、昨日どちらの工場の汽笛が早く鳴ったかということについて、議論をしました。

「こちらの工場の汽笛が早く鳴った。」と、製紙工場の煙突は、いいました。

「いや、私のほうの工場の汽笛が早かった。」と、紡績工場の煙突はいいました。

結局、この争いは、果てしがつかなくたのです。

「今日は、どちらが早いかよく気をつけていろ！」と、製紙工場の煙突は、怒つて、
 紡績工場の煙突に對つていいました。

「おまえも、よく気をつけていろ！ しかし、二人では、この裁判はだめだ。だれか、
 たしかな証人がなくては、やはり、いい争いができて同じことだろう。」と、紡績
 工場の煙突はいいました。

「それも、そうだ。」

こういつて、二つの煙突が話し合っていることを、空のやさしい星は、すべて聞いていたのであります。

「二つの煙突が、どちらの工場の汽笛が早いかな、だれか、裁判するものをほしがっています。」と、やさしい星は、みんなに向かつていいました。

「だれか、工場のあたりに、それを裁判してやるようなものはないのか。」と、一つの星がいました。

すると、あちらの方から、

「この寒い朝、そんなに早くから起きるものはないだろう。みんな床の中に、もぐり込んでいる、そんな汽笛の音に注意をするものはない。それを注意するのは、貧しい家に生まれて親の手助けをするために、早くから工場へいつて働くような子供らばかりだ。」

といった星がありました。

「そうです。あの貧しい家の二人の子供も、もう床の中で目をさましています。」と、やさしい星はいいました。

それから後、やさしい星だけは、下の世界をじっと見守っていました。

姉も、弟も、床の中で目をさましていたのです。

「もうじき、夜が明けますね。」と、弟は、姉の方を向いていました。

また、今日も電車の停留場へいつて、新聞を売らねばならないのです。弟は昨夜、犬に追いかけられた夢を思い出していました。

「いま、じきに、製紙工場か、紡績工場かの汽笛が鳴ると、五時なんだから、それが鳴ったら、お起きなさいよ。姉さんは、もう起きてご飯の支度をするから。」と、姉はいいました。

このとき、すでに母親は起きていました。そして、姉さんのほうが起きて、お勝手もとへくると、

「今日は、たいへんに寒いから、もつと床の中にもぐっておいで。いまお母さんが、ご飯の支度して、できたら呼ぶから、それまで休んでおいでなさい。まだ、工場の汽笛が鳴らないのですよ。」と、お母さんはいわれました。

「お母さん、赤ちゃんは、よく眠っていますのね。」と、姉はいいました。

「寒いから、泣くんですよ。いまやと眠入ったのです。」と、お母さんは、答えました。姉さんのほうは、もう床にはいりませんでした。そして、お母さんのすることをつだいました。

地^ちの上^{うえ}は、真^まつ白^{しろ}に霜^{しも}にとざされていました。けれど、もうそこそこに、人^{ひと}の動^{うご}く気^きが
したり、物^{もの}音^{おと}がしはじめました。星^{ほし}の光^{ひかり}は、だんだんと減^へってゆきました。そして、太^た
陽^{いよう}が顔^{かお}を出^だすには、まだすこし早^{はや}かったです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「時事新報」

1924（大正13）年1月7日

※表題は底本では、「ある夜《よ》の星《ほし》たちの話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「ある夜の星だちの話」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2013年8月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ある夜の星たちの話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>